

それを詩的に表現して「大自然のいのちから私たちは生まれ、大自然のいのちに生かされ、大自然のいのちの活動の中に帰る」などと語られるのですね」

F 「人間の（いのち）は物理的なエネルギーの一つの活動体であるということですね」

D 「ええ、心とか精神的な働きをしばらくおいて、物質的にいえば、そういうえましよう」

*

F 「寿命（いのち）の本質はエネルギーとすると、阿弥陀仏は寿命無量すなわち無量のいのちといわれてますから、阿弥陀仏は無量のエネルギーということになりますね」

D 「そういえると思っています。このような千変万化し、万物を生成し維持し展開する物理的な無量のエネルギーと寿命無量の阿弥陀仏の働きとは別のものではなく、阿弥陀仏の寿命無量の働きの中に物理的なエネルギーも含まれていると思います」

F 「すると、阿弥陀仏の寿命の中に、エネルギーの活動である大自然の生命のいとなみも含まれているのですね」

D 「そう理解しています。『涅槃経』（寿命品）の中に

「たとえば阿耨達池の四大河を出すがごとし、如来もまた爾なり。一切の命を出したもう」とあります。阿耨達池はインドの四つの大河がそこから流れ出る、ヒマラヤの奥にある伝説的

な広大な池のことで、それを如来にたとえ、あらゆるいのちが如来から出ていると、説かれていいるのです。なおこういことをはつきりと語ったのは近代の代表的仏教者である清沢満之先生で、先生の言葉に

「宇宙万有の千変万化は皆是れ、一大不可思議の妙用に属す。（乃至）一色の映ずるも、一香の熏ずるも、決して色香其者の原起力に因るに非ず。皆彼の一大不可思議の発動に基づくものならずばあらず」

（無能の私をして私たらしむる能力の根本本体が、即ち如来である。（乃至）如来は私に対する無限の能力である）

とあります。宇宙の活動も万物や私の存在も、それらを成立せしめるのは一大不可思議な力であり、それを阿弥陀仏の働きとしてみておられます。すると阿弥陀仏の働きと物理的なエネルギーによる大自然の活動は一つのことになります」

*

F 「寿命無量の阿弥陀仏の働きの中にかぎらない物質的なエネルギーが含まれると言っているのとすれば、阿弥陀仏の無量のいのちと、私たちのいのちとはどういう関係があるのですか」

D 「私たちの寿命（いのち）は生きていく身体的ないのちですから、私たちのいのちは限定されたいのち、一つの形を取ったいのちであります。一方、阿弥

陀仏のいのちははかりなきいのち、いわば無限ないのちです。限りあるいのちは限りない無限ないのちが限定されて、一つの形をとったものといえましよう。海の水から泡が出るように」

F 「私たちのいのちは阿弥陀仏のいのちが限定されたものなのですね」

*

D 「どう限定するかはそれぞれの業が関わりますけど、私もそう思います。ただ、物質的なエネルギーの活動は阿弥陀仏の働きの一つの（側面）であり、仏としての阿弥陀仏の主たる働きではありません」

F 「阿弥陀仏の仏としての主たる働きとはなんですか」

D 「一切衆生の救済です」

F 「衆生救済の働きは阿弥陀仏のどういうはたらきですか」

D 「それは阿弥陀仏の光明無量の徳です。光明とは大悲の智慧です。ですから阿弥陀仏の徳は無碍光とか智慧光とかいうように光明で表現されます」

F 「そういえば経典には寿命無量のことはあまり説かれず、光明の働きがもつぱら説かれているのは、衆生救済の内容に直接関わるのは光明無量の徳だからですね」

D 「そうなんです。寿命無量の徳は衆生救済の光明の徳をどこまでも保持し、維持し続けている働きです」

F 「先月号では維持する側を（能

持）といい、維持される側を（所持）というお話でした。そうすると寿命の徳は衆生救済の徳を保ち維持する力なのですね」

D 「ええいのちである寿命はエネルギーですから、阿弥陀仏は無量のエネルギーであるといっている側面があるとすれば、それは阿弥陀仏における衆生救済の徳をどこどこまでも維持し保ちつづける能力（能持）は、阿弥陀仏の無量の寿命の働きであります。この寿命を土台にして阿弥陀仏の光明は十方の衆生を救済したもうのです。衆生の救済が阿弥陀仏の根本の願いでありましよう」

*

F 「寿命が無量であるということとは物理的エネルギーはいつまでもなくなるはずです。エネルギーは消費されて減っていかないのでしょうか」

D 「物質的な領域での根本法則にエネルギー保存の法則というものがあります。

（エネルギーの形態は転換するが、それを生成させることも消費させることもできない。これをエネルギー保存の法則という）といわれています。例えば電気ストーブをつけると、電気エネルギーは熱エネルギーや光エネルギーに変わります。けれどもエネルギーの総体は増えも減りもしない、ただエネルギーの形態が変わっただけです。また、固形としての物質的エネルギー

であるご飯を食べると糖分に変わり、糖分は手足を動かす運動エネルギーや体温などの熱エネルギーに変わります。このようにエネルギーの形態は変わっても総量は減りも増えもしない。不増不減で、消滅せずいつまでも保存されていきます。このエネルギー保存の法則は、物質的なエネルギーの総量の不減をいう、極めて重要な根本法則です。ですから、それは阿弥陀仏の寿命が無量であるということ側面から証明していると思います」

F 「今までのお話では、物質的な働きも阿弥陀仏の寿命の中におさまるといってましたね」

*

D 「ええ、ですからもつぱら物質的な領域を観察し、そこに法則性を見出し、さらには物質を応用していくという自然科学の対象領域は、阿弥陀仏の寿命の領域の中に入るといえましよう」

F 「自然科学は阿弥陀仏の寿命の物質的側面の領域にもつぱら関わっているのですね」

D 「ええそうです。阿弥陀仏の光明無量の働きである衆生救済に直接関わるのが宗教の領域であり、自然科学が関わるのはもつぱら阿弥陀仏における寿命の物質的領域です。ですから、宗教と自然科学とは矛盾しないのです。ただ関わる領域に違いがあるのです」（了）

歎異抄

後序第八講

まことに如来の御恩ということをばさたなくして、われもひと、よしあしということのみもうしあえり。聖人のおおせには、「善悪のふたつ総じてもって存知せざるなり。そのゆえは、如来の御ことによしとおぼしめすほどにしりとおしたらばこそ、よきをしりたるにてもあらめ、如来のあしとおぼしめすほどにしりとおしたらばこそ、あしさをしりたるにてもあらめど、煩惱具足の凡夫、火宅無常の世界は、よろずのこと、みなもつて、そらごとたわごと、まことあることなきに、ただ念仏のみぞまことにておわします」とこそおおせはそうらいしか。

〔歎異抄〕後序より

◎現代語訳

本当にわたしどもは、如来のご恩がどれほど尊いかを問うこともなく、いつもお互いに善いか悪いか、そればかりをいいあっております。親鸞聖人は、「何が善であり何が悪であるのか、そのどちらもわたしはまったく知らない。なぜなら、如来がそのおこころで善とお思ひになるほどに善を知り尽くしたのであれば、善を知ったといえるほどに悪を知り尽くしたのであれば、悪を知ったといえるからである。しかしながら、わたしどもはあらゆる煩惱をそなえた凡夫であり、この世は燃えさかる家のようにたちまちに移り変わる世界であって、すべてはむなしくいつわりで、真実といえるものは何一つない。その中であって、ただ念仏だけが真実なのである」と仰せになり

ました。

*

ここに「まことに如来の御恩ということばさたなくして、われもひと、よしあしということのみもうしあえり」といわれています。この意味について考えてみたいと思います。

私たちは人間生活の日々の中で、いつも何を思い、何を語り、何に思い煩っているかという、人生生活上のさまざま「よし悪し」でありましょう。たとえば、人と話をするときなど、身体上のどこが悪いとか、最近良くなったとか、どこの医者はいいいとか悪いとか、健康にはこれを飲むのがいいとか、これを食べるのは良くないとか、体の心配での「よしあし」が際限もなく語られます。

しかし、阿弥陀仏のご恩の話は一つも話の中に入ってきません。

あるいは経済的なことへの「よし悪し」も常に気になるところです。商売がうまくいっているからいいとか、うまくいかないから悪いとか、物価が高くてやっつけいけぬとか、今は出費が減って良くなったとか、老後の蓄えが乏しいので困るとか、それは有るからいいとか、生計上の「よし悪し」に大変思い煩っています。しかし、如来のご苦勞に思いをいたすことがどれほどあるでしょうか。

あるいは人間関係において、あの人は親切だからいいとか、あの人は冷たいのでいやだとか、彼は礼儀を知っているからいいとか、知らないから悪いとか、気が利くからいいとか、気が利かないから駄目だとか、人間関係のことでどれほど心を配り、煩っているでしょうか。

人間同士のふるまいのよし悪しばかり

が沙汰され、阿弥陀仏のご恩は無視されています。

さらに政治とか社会的正義に関しても同じです。政治や社会のあり方に関わるのは一人一人の人間であり、また人間の組織（共同体）ですが、国内外の平和や社会的な正義と腐敗を問題にする場合も、人間や人間の共同体の行為が正しいか間違っているかの「よし悪し」だけを問題にしています。しかし人間自体が大変汚れた存在であり、罪深い存在であり、しかもその罪濁を取り除くことができないという壁にいつも人間社会はぶつかっています。

人間とこの世を浄化し、あるべき状態にあらしめようと働きかけられている阿弥陀仏の本願力が人間と世界を浄化する原動力ではないでしょうか。社会の平和や安定に関わろうとすると、如来の御恩を「さたせずして」、人間や人間の共同体のありかたのよし悪しだけを問題にしているのが私たちです。

その阿弥陀仏のお力に依ることなしに世界や社会の平和と安定を計ろうとすると、あとはお互いの利害損得上での妥協における一致点で話をつけていくしかありません。「そんなことしたらお互い損だからやめておこう」というところで何とかけんかをせざるという、そういう解決策が現実にはもつとも多く行われています。しかし、利害が一致しない場合、その不一致が大きくなると争いが起こるといふ危険性は常につきまといまいます。

（なお一言すると、では、神などの絶対者を第一に立てていけば世の平和と安定は実現していくのかという、絶対者的なもの「よし悪し」において争いを

さらに拡大しているのが現実です。そのことで一神教的原理が現代の問題になっています）

*

最後に宗教的な救いを自らの上に成就しようとして、聞法求道に励んでいる場合にも、どこまでも自分の姿や心の内容や行いのよし悪しばかりに執われ、そればかりに目がいつてしまふ。「心が明るい暗いか」「自覚ができたかできないか」「教えが自分に分かるか分からないか」「有り難いか有り難くないか」「自分の悪が知れたか知れないか」など、自分の側の「よしあし」ばかりに目がいつて、阿弥陀仏のご恩に心が依らないのです。阿弥陀仏が本願を成就し、弥陀の功德を万人に回向してくださっていること、そのことが人の人生そのものの不幸を決定する真実であり、ひいては世界の安定の基礎になっていることを知らせて頂くのであります。であれば、如来の本願力のご恩にこそ、まず心を寄せるべきでありましょう。（了）

《春季彼岸永代経法要》

3月22日（水）
午後2時始

（どなたでも自由にお参りください）
* 道順——JR甲子園口下車。南出口を出て、ミスタードーナツ店の横の道を南に。最初の信号の一つ手前の四角を東に曲がって50m。駅より4分。

【初めてのインド6】

カルカッタのラマクリシュナミッションの本部のある河岸からボートに乗り、着いたところはドゥキネツェン寺院だった。主神はカーリーという黒い女神で、首にドクロの首飾りをして、見る者を畏怖せしめる。お香の強烈なおいと灯明の油が粘り付いた建物の内部にカーリーは祀られている。この寺に近代インドの聖者として著名なラマクリシュナ（1836〜1886）が寺僧として住んでいた。彼の居た部屋に入ると中は狭く、彼のベッドがそのまま残っていた。室内には数人の参拝者が彼を偲んで静かに座ってラマクリシュナを憶念している。かつてラマクリシュナはここで、訪れた人たちに深い宗教経験を語った。それが評判になり多くの若きインテリが彼の元に来てきた。優れた弟子の一人ヴィヴェーカーナンダは後にラマクリシュナミッションを創設し、インド国内はもとより世界各地に支部ができたのである。ラマクリシュナにはサラダデーという妻がいたが、普通の意味での夫婦という関係では無かったといわれている。師の亡き後はホーリー・マザー（聖なる母）といわれて敬われた。そこを出てからカルカッタ市内にある博物館を見学。ここには多くの仏教遺物が展示されていた。仏陀の物語の見事なレリーフは印象的だった。現代のインドでは仏教は影が薄いが、過去のインド文化史において、仏教は最も普遍的な深い真理を明らかにしたのはいうまでもないが、芸術的にも最も優れたものを産み出したことは、この博物館を見るだけでもはっきりと分かる。カルカッタを離れ、車でビハール州のガヤ駅に降り、そこからチャーターしたミニバスにのって仏跡を回った。まずブッダガヤに参詣。途中に、仏陀がさとりを開かれる前に修行された前正覚山が田園の向こうに見える。ブッダガヤはさすがに仏教第一の聖地だけあって、落ち着いた空間の中にマハーボダイ寺院の大塔が紺碧の空にそびえる。後ろ

に仏陀がその座の上でさとりを開かれたという金剛座があり、その下で正覚を成就されたという菩提樹の子孫が今も植わっている。多くのチベット人仏教徒が五体投地の礼拝を熱心に行っていた。大塔の周りの欄楯は二〇〇〇年近くも前のものが残っているとのこと。見わたす環境は清らかで仏陀への敬虔感情がおのずから沸き、しばし感慨にふけた。このころ（一九七〇年）のブッダガヤはほとんど観光化されてはいなかったのだが、近年は観光化がすすみ宗教的趣きが減ったといわれている。そのころは大塔の前に菩提樹の葉や珠数などを売る小さく粗末な店が三件ほどあるだけで、ホテルというほどのホテルもなかった。名残は尽きないが私たちはブッダガヤを離れ、ラジギールに入り、王宮跡に行く。頻婆娑羅王が幽閉された牢獄跡というのもあった。またその少し南に竹林精舎跡があり、ここは仏弟子たちの修行の場であり寝起きの場であった。そこから霊鷲山に向かう。途中に釈尊当時の名医といわれた耆婆の薬草園跡がある。今もここらは薬草がとれるとのこと。頻婆娑羅王が釈尊のご説法を聞くために造られたという「ビンビサーロード」という小道を登る。途中で小さな洞窟があり目連や舍利弗がここで修行をしたという。やがて小高く隆起したところがあって、そこが霊鷲山で釈尊説法の座だったところである。仏陀の息吹がじかに感じられ、感動が胸にふつふつと沸いてくる。いったん下において向かいの山の中腹にある七葉窟に行く。ここは釈尊入滅後、阿難が仏陀の説法を誦出した仏典の第一結集の場所といわれている。夕方、ふもとの日本山妙法寺に行き、宿泊させて頂くことになった。日本山妙法寺は、ガンジーと交わって非暴力の信念による平和運動家であった藤井日達上人が建てた寺で、インドはもとより諸国にいくつも建立されている。私たちは妙法寺で夕事の勤行に参加。二時間ほどうちわ太鼓をたたきながら「なむみょうほうれんげいきょう」を唱える。二時間ほどしてやっと 勤行が終わり、夕食となった。